

さまよえる客

片山敏彦著作集 第五卷

片山敏彦著作集 5

© 1972 Misuzu Shobo

1972年1月20日 第1刷発行

¥ 900.

著 者 かた やま とし ひこ
 片 山 敏 彦

東京都文京区本郷3丁目17-15

発 行 者 北 野 民 夫

東京都新宿区改代町24

印 刷 者 田 中 昭 三

発 行 所 東京都文京区
 本郷3丁目17
 郵便番号 113

株式
会社

みすず書房

電話 814 - 0131(代)
振替東京 195132

(第4回配本)

理想社印刷・鈴木製本

目次

I

ゲーテと共に・	7
ゲーテとリルケ・	18
詩人としてのゲーテ・	28
ゲーテの『イフィゲーニエ』について・	43

II

シラーの形姿・	57
シラーの記念祭に・	70
ヘルダーリン	

1	頌・・・・・・・・・・・・・・・・	79
2	さまよえる客・・・・・・・・	86
	カール・マルクスの詩・・	93
	ヴァーグナーの文学・・	102
	リルケ	
I	リルケの使命・・・・・・・・	114
II	おもかげ・・・・・・・・	122
III	リルケの思想・・・・・・・・	129
	若きヘルマン・ヘッセの二元・・	148
	魂の贈りもの・・・・・・・・	174
	シュテファン・ツヴァイクについて・・	179
	ハンス・カロツサの詩・・	186

III

人間性の苦闘の世代・	197
トラークル・	215
カール・シュピツテラー・	219
フランツ・ヴェルフェルの思想・	223
現代ドイツ文学所感・	235
解説・	249
長谷川四郎	

I

ゲーテと共に

幾月か幾年かの後にくり返しくり返し立ち現われて来るゲーテ。その度ごとに視野がひろげられる。生命の成熟ということの意味をゲーテほど実例的に教えてくれる人はほかにはない。

教養は生命のためである。

形式は流動の器である。

忍耐は、生命の結晶のもっとも微妙な過程のためである。詩の力は、経験的な宿命的不幸に克つ力である。ゲーテの眼は、太陽に應じて拡がり一致しつつ、魂は垂直の時間を量っている。科学が詩に向かい、法則が美を暗示する。

もっとも特殊なものをもっとも普遍的であることをゲーテは示した。自己中心であるようにみえたとき彼はじつはもっとも普遍的な内容に熱中していた。彼はつねに生きた価値の実存性に即していた。ナポレオンを讃嘆したとき、ゲーテはナポレオンという個人を超えて或る自然的な力の活動を讃嘆していた。そして『ヴェルテル』のみを通じてゲーテの文学を愛しながら、しかし一種の天才的

直覺によってゲーテの大きさを感じていたナポレオンが、ゲーテに面接して「君こそ人間だ」と言ったとき、しかしゲーテはじつは、ナポレオンの見ている場所にはいなかった。ゲーテの行為の面はナポレオンのそれとは違っていた。ゲーテの存在の根は垂直の世界へ熱心に入り込んでいた。ナポレオンが見ているのは見事なたくましい現実的な亡霊だった。

ゲーテほど真に偉大な象徴主義者はいない。彼が総合的なのは彼の偉大な象徴主義のゆえである。偉大な象徴主義は主観主義からは生じないことをゲーテが示している。歴史に対して科学に対して、ゲーテは象徴主義者であった。ゲーテの作品が与える究極の静平感、解放感はゲーテの象徴主義的体験から生ずるように思われる。

ゲーテが最後に住んだ世界は《西洋的・東洋的世界》であった。それはゲーテが内面から創造した魂の空間であり、最晩年のゲーテにとつてはもつとも具体的な空間であった。彼が現実主義者自然観察家として生きた何十年かの努力がゲーテに与えた最美の果実は、あの西東的空間の具体性であった。

*

美術を熱愛したゲーテの周囲に、ゲーテに値する美術家は一人もいなかった。一人のロダンもデスピオも、一人の宗達もセザンヌもいなかった。もつとも一人のゴッホが彼に近づいたと仮定したら、ゲーテは彼を許容したろうか？ おそらくはクライストやヘルダーリンが拒まれたように拒まれたであろう。ゲーテが美術観賞の世界で遺したものは、ゲーテの詩自体が示した美のヴィジョンの深淵

の深さ輝かしさに比すればこっけいなほど劣っている。ゲーテの本質がギリシャ的であつたほどには、ゲーテのギリシャ主義的造型美術感はギリシャ的ではない。それはむしろローマ的である。その点でゲーテと親しかつた美術家らの貧弱さよ！ おそらく彼らは、ニコラ・プーサンを、クロード・ロランを誤解していた。

今日それらしいことを超えながらゲーテの詩は輝いている。ゲーテの美術観はその大部分がすでに枯死したように見えるのに、ゲーテの詩作品はますます豊かな泉である。ここにこそ、ゲーテと時間との真の關係が感じられる。「ゲーテの時間は未来から来、現在に當つて逆流する」といわれた西田幾多郎氏の言葉は、ゲーテについて言われたもっとも美しい適切な言葉の一つと私には思われるが、このことはまさにゲーテの詩作品の中で感じられる。——たとえば『根元語』(Urworte)のよな詩の中で。

昨夜私はドビュッシーの音楽を聴いた。ドビュッシーの音楽ほど、私の精神の中に明瞭な色彩と形象とのうごきを現識させる音楽はほかにない。かつてパリのトゥーシュ・クワルテットでドビュッシーのクワルテットを聴いたときに、私の想像力の世界には、淡い堇いろと明るい橙々色とのひじょうに美しい縞の模様が流れつづけ、内心の視野がその幾何学的限定を享けることが大変ところよかつた。昨夜、『鐘』を聴いたときには、強い一本の新緑のようなみどりの流動的な線が横にうごきつづけた。私は真冬の中にいて、世にも爽やかな新緑のみどりを持った。いな、それは新緑のみどりと私が思うものよりも、もっと爽やかなみどりであり、無比なみどりであり、私が初めて感覚しているみどりであ

った。それは真に感覚の夜明けといふべきものであり、感覚が直接な経験として靈性になっている。
 ゲーテが与えるものもまたそれに似ている。

教養が、こんな感覚体験を与える創造の泉を培ったということを目しなければならぬ。そして
 そのような教養こそ、今後の芸術創作にとってはもっとも必要なものとなりつつあることを考
 えなければならぬ。

今日精神の混沌に生きた秩序を与え、感覚を今一度真に創造的にし、人性に新鮮な風を吹き入れる
 ものは正しく考えられた教養である。ゲーテはその点最大の師である。

教養と芸術と自然と生命との関係についてゲーテほど見事な教養を与える人はいない。ゲーテは人
 類と自然との最大傑作である。

*

彼は「自己を夢として感じつつ」もっとも活動的であつた。主観から客観への旅路に、「世界敬虔」
 を方法論としながらもっとも良く自己を生かした。特殊なものこそ真実在的であることをスピノザ
 から学んで、万物の根本である不滅の一者を体感した。人生における必然的なものと偶然的なもの
 についてのひじょうに興味ふかい確信が彼のものとなった。（その証左がオルフィッシュな詩『根元
 語』であるがそれについては別に書く。）

ゲーテは詩作の中に功利意識を交えなかった。触つた部分を不随意化する硬化的影響を用心ぶかく

遠ざけた。詩はもっとも総合的な生命の結晶でなければならない。その仕事は何よりも或る無私の境地で行なわれなければならない。永遠の現在（リルケの「純粹現在」）が形を取る仕事は、かくれた苦しい仕事である。神または無だけを相手にする仕事である。それは自然や社会や家庭やまたは反省やの、いっさいの体験の素材を呈出して、アリエルの判断を求める仕事である。そしてアリエルは、自己の本質に似ているものだけを、それらの素材の中から採り上げるであろう。

自己の獲得とは、自己を超える度合いの獲得である。ゲーテの仕事が成熟するのは、この種の獲得を絶えず生きたためである。

ゲーテにもっとも似ているニーチェは、自己を超える冒険に力を集中した。そして斃れた。ニーチェのつかんだ仕事からはもっともゲーテに似ている魂の成熟の薫りが立ちのぼる。

ゲーテもニーチェも同時代の人々からほんとうには理解されなかった。しかもゲーテは言った。

「君の自国において君は好きなことを書け。他国にあるのは過小か、過大。自国にこそ、愛の絆があり、節度と目的がある」と。

ゲーテはジードやニーチェのように家庭の敵ではなかった。むしろデュアメルのように、家庭の意味を知っていた。家庭の奥に、祈りの場所を作ることが彼は知っていた。単純な妻クリスチアーネの一見平凡な功績をわれわれは忘れることはできない。ゲーテは家庭の父であるとともに、最大の神秘家の一人であった。妻クリスチアーネは神秘家ゲーテには無関心だった。彼女はゲーテの夢が万人に關する夢であろうが、なかりうが、ゲーテの肉体の周囲に小さな静かな場所をつくった。その少しば

かりの静かさが大きな世界の母胎であつた。おそらくゲーテが、ストイシズムにおいてエピクテトスに似ている時間は、この家庭の中での時間であろう。

*

ゲーテは生涯にいくつかの超自然的な体験をした。彼はインド風なまたはエンペドクレス風な輪廻説を信じていたらしい。彼の描いたマカーリエは、その精神を太陽系の端まで往かせることができる。ゲーテは、八年後の自分の姿を明瞭に見る経験を持ったり、遠方の大地震を同時刻に感じたりした。この種の体験は、リルケやロマン・ロランの生涯にもある。

しかしそういう体験に対する慎重さを、彼らは皆警告している。確かに自然の背面は存在するがその面に対して強要的であつてはならぬ。「もしそうすると魂は有害な影響を受ける。」（リルケ）

ゲーテもリルケも、われわれの存在が無限の神秘にとり巻かれていることを予感しながら、地の現実の現在の意味をどこまでも中心として生きた。そこから彼らの象徴主義は欲びに向かつて、正当な努力と苦しみとを支払いつつ徐々に上昇した。彼らは人間の生活の本質が神的なものであることを詩によって示した。哲学者のアランもまたこの詩的態度に根本的な同感を持っていることを私は彼の近著『精神の諸季節』の中の「ゲーテとスピノザ」の中で読んだ。「時間的継続に関わらぬ各人の真理が存在する。各人の中に永遠者が存在し、それが各人の固有のものである。」*

固有のものをになって流れを渡る聖クリストフ。

*

詩人の固有の使命は、理性(Animus)と魂(Anima)とを媒介するにある。理性が代表する我と、魂の相である自我とはしばしば背理する。アニムスの働きは、対象化しつつ自覚を明瞭にするはたらきである。(ヴァレリーのナルシス的精神^{エスプリ}というものは、純粹の自己を純粹に対象化しようとするエスプリのはたらきそのものの特徴を持っている。その代表者であるテスト氏、「分類しつつ墓へ入る」運命を感じているテスト氏に対する妻のアニマ的態度は感動的である。)詩人としてのヴァレリーは、自己の中のテスト氏を、妻のアニマと媒介するときもつとも強力である。そしてそのときもつとも美しい。

テスト的、理性的ヴァレリーと詩人ヴァレリーとのあいだに仕事の意味、作るはたらきの意味が自覚される。その自覚をヴァレリーは最近の『詩学』^{*}の中で述べた。

* Valéry : Le Cours de Poétique (Première leçon).
コレージュ・ド・フランスの講義。雑誌「イグドラシル」第二巻第九号所掲。

ヴァレリーにおける仕事の意味、faireの意味は、かつてリルケが『若い詩人への手紙』の中で書いたこととはなはだ相通じる。

詩人が行為において最高可能のことをなすとき、彼はアニマとアニムスとの協同を具体化する。

L'âme (Anima) se tait dès que l'esprit (Animus) la regarde. 「アニムスがアニマを眺めるときアニマは沈黙する」とポール・クロードルは書いたが、詩人はアニマをしてアニムスを信頼させる。ゲーテはこの困難な仕事をみごとにやった人はない。彼は理性の自覚を音楽と和解させる。

In holder Dunkelheit der Sinnen

Kommt' ich wohl diesen Traum beginnen —
vollenden nicht.

諸感覚のやさしい闇の中で

私はこの夢を始めはしたが——

それを完成し得なかった。

詩はこの方向において自己目的である。しかし、詩がアニムスに映じた自己の姿を見て、そこに自足的に自己目的を感じるとき詩の進展は停止する。素朴な感覚主義や印象主義の詩が速く進展を停止するのは、感覚のゆえではなくして、感覚自体が習慣的アニムスすなわち、マンネリズムにとらわれるためである。このような素朴さに対しては、まさにヴァレリーの純粋行為力こそ健康な回復力である。しかしまた一方には素朴な知性主義の詩がある。アニマ的体験との接触面を持たない詩は、詩の本質を取り落としている。すなわち、そこにはかけがえない音楽がない。反省された一平面の上で工夫されて描き出される複雑さは詩の複雑さではない。詩の複雑さは、内面的なもので